



最終号刊行にあたって

著者	荒川 麻里
雑誌名	映画で学ぶ《教育学》
号	4
ページ	1-1
発行年	2014-12
URL	http://hdl.handle.net/2241/00124137

最終号刊行にあたって

ここに、『映画で学ぶ《教育学》』最終号を刊行する。

何でも終わりを告げるのは、幾許かの郷愁を誘うものである。しかし、さらなるパワーアップを期して、ここで一端の着地をお許しいただきたい。本誌は、映画などの作品を取り上げて教育学の視点から論じ、議論を重ねてきた取り組みの成果物である。教育実践のみならず、さまざまな人生の局面で信念を貫き、日々の苦悩を乗り越える勇気と元気を与えるような冊子になったと自負している。

巻末に記した全掲載作品リストにあるように、2012年2月の創刊から本号まで、56作品を取り上げることができた。ひとえに、冊子刊行に尽力してくれた仲間たちのおかげである。ここに心からの感謝の気持ちを表したい。とりわけ学生諸氏の個性溢れる柔軟な発想には、編集担当として時に不安を覚えながらも、一つ一つの論考の完成が大変待ち遠しかった。彼らの努力無しには、本誌は存在し得ない。また、福野裕美さん（岡山学院大学）と澤田裕之さん（国際学院埼玉短期大学）には、業務多忙の中、本号を含めるすべての号に論考をご提供いただいた。学問研究を共に続ける仲間存在は、大変貴重なものと痛感している。

最終号となった本号には、11の論考を掲載することができた。1940年制作でありながら馴染み深く感じる『ピノキオ』を題材に教育行為について本格的に論じたものから、同じアニメーション映画である『クレヨンしんちゃん』で現代家族の絆を考察したものまで幅広い。山田洋次監督の映画『学校』シリーズからは2作目を取り上げ、山田監督の教育観について検討を深めてもらうことができた。同シリーズは4作品あり、本誌2号でⅠとⅢを、今回はⅡと共にⅣにも言及してくれたため、シリーズ全体を捉えることができた。

本誌の一つのこだわりは、作品自体に対して読者にイメージを持っていただくために、DVDのジャケット写真や映画の場面写真をカラー刷りで掲載することだった。この点では、DVD販売元等のご担当の皆様からも、多大なるご支援を頂戴した。残念ながら画像掲載の許諾を得られない作品もあったが、そうした場合は筆者自ら作画をするなどの工夫が凝らされている。この点でも、読者に愉しんでいただけたらと思う。

最終号をお届けするに際し、これまでご支援いただいたすべての方々に改めて謝意を表したい。ありがとうございました。

2014年12月

代表 荒川 麻里